京都大学言語学懇話会
2023 年度 発表要旨

例会報告

第 120 回例会

日時・場所　2023 年 4 月 8 日（土）　13:30 ～ 16:45

於 京都大学文学部校舎第 1 講義室

発表題目　ドラマコーパスと日常会話コーパスを利用した反復構文の分析

徐　敏徹（愛媛大学）

条件節の時制とモダリティ

有田　節子（立命館大学）

第 121 回例会

日時・場所　2023 年 7 月 8 日（土）　13:30 ～ 16:45　於 Zoom

発表題目　台湾華語の二つの助動詞について

—似た文脈における使用と realis/irrealis 分析の問題点—

鄭　雅云（京都大学）

ダパ語類別詞の機能拡張

白井　聡子（東京大学）

第 122 回例会

日時・場所　2023 年 12 月 9 日（土）　13:30 ～ 16:45

於 京都大学総合研究 2 号館第 8 講義室

発表題目　イラン諸語と言語接触 —タリシュ語を例に—

岩崎　崇雅（京都大学大学院）

キルギス語の助動詞 *ele* と文接続機能の可能性

大﨑　紀子（京都大学）

ドラマコーパスと日常会話コーパスを利用した反復構文の分析

徐　敏徹

本研究では，日本のドラマの字幕を利用して構築した『ドラマコーパス』と，国立国語研究所が構築した『日本語日常会話コーパス』（以下 CEJC）を利用して，日本語の述語反復構文の分析を行った。述語反復構文の例としては「食べることは食べる」のように P（Predicate）が名詞化辞「こと・の・∅」と「は」を軸としてその前後に反復される「P ことは P」を取り上げた。

ドラマにおける言葉遣いは，話し言葉的な性質を帯びるものの，日常会話とはかけ離れているところもあり，「準口語」という用語が使われる場合もある。このようなドラマの字幕を言語資源として利用した理由は，資料の収集が容易であるため，大規模なコーパスを構築することが可能だからである。一方，『CEJC』は書き言葉コーパスや準口語を利用して構築した『ドラマコーパス』に比べると，その規模が小さいという点が短所として挙げられる。このような二つのコーパスを述語反復構文の分析に用いることで，両者の短所を補うことができると考えられる。

「P ことは P」を上述した二つのコーパスを利用して分析した結果，次の点が明らかになった。まず一つは，「P ことは P」に「こと・の・∅」という複数の名詞化辞が用いられている点である。とりわけ，「食べる∅は食べる」のごとく，「∅」が用いられている例が最も多かった。もう一つは，「P ことは P」の P にナ形容詞が使われる際には「N は N だ」のようなトートロジーの形式になる傾向が見られる点である。つまり，「大丈夫なのは大丈夫だ」ではなく，「大丈夫∅は大丈夫だ」のような形式になるということである。

また，「P ことは P」に動詞やイ形容詞が用いられる場合は，先行述語と後行述語の時制形式が「食べることは食べる」や「食べたことは食べた」のように一致する傾向がある。今回の分析結果において，「食べることは食べた」のごとく，二つの述語の時制形式が一致しない例は皆無であった。さらに，「P ことは P」の後行述語に動詞が敬体で用いられる際には「食べることは食べます」のようにマス形が使われるのではなく，「食べることは食べるんです」のようにノダが使われ，二つの P が同じ形式になる傾向も見られている。

最後に，「P ことは P」には「食べたことは食べたけど」のように，逆接の表現が続く傾向がある。逆接の表現としてはほとんどの用例において「けど」が使われており，「が」が出現している用例は少数であった。

（そ　みんちょる）

条件節の時制とモダリティ

有田　節子

本発表は現代日本語の条件文の時制解釈と主節のモダリティ、特に命令文が現れる場合の制約について、次の２点を議論した。

1）条件文の時制は発話時、主節時とは別の第３の基準時に基づき解釈される。

2）日本語（標準語）条件文のいわゆるモダリティ制約は日本語特有のものではない。

1)で問題とするのは次の現象である。

(1). {a.半分終わったので/b.半分終わったなら/c.半分終わったとき}、止めてください。

(2). 中山日出子が突然会社を辞めたら、それは却って、噂を認めたことになる。

(1a-c)の副詞節はいずれもタ形だが、(1a)は過去時の解釈、(1c)は未来時の解釈で、(1b)にも過去時の解釈が可能である。この解釈の違いは、副詞節の意味、つまり(1a)が理由を表す論理節、(1b)も条件を表す論理節であるのに対し、(1c)が主節の事象が成立する時を表す時間節であることに因る。時間節は常に主節の事象時が基準になるのに対し、論理節には発話時が基準の解釈がある。(1b)の条件節は(1a)の理由節とは違って未来時の解釈もある。しかし、(1c)と同様に主節時の解釈とすると、(2)のタラ節の扱いが問題になる。(2)のタラ節の事象時は未来時で、しかも主節の「噂を認めた」の事象時よりも後であるので、主節時が基準の解釈とは言えない。(1b)と(2)を統一的に説明するには 1)を認める必要がある。

2)で問題とするのは、次の現象である。

(3). {a. (?)選択が終われば/b. 選択が終わったら}、お金を入れてください。

(4). {a. 手伝わないなら/b. *手伝わなかったら}、かき乱さないで。

(3a)の落ち着きの悪さは「バ節と主節が同一の主語でバ節の述語が非状態性の場合に、主節に行為要求の表現は現れにくい。」のようなバ形式の持つ特異な制約として説明されてきたが、標準日本語とは条件形式体系が異なる佐賀東部方言においても類似の制約がある。佐賀東部方言は「基本形＋ギ」「タ形＋ギ」「基本形＋ナイ」「タ形＋ナイ」の４つのパターンがあるが、主節が命令文の場合、「状態述語の基本形＋ギ」は現れるが、「非状態述語の基本形＋ギ」は落ち着きが悪いという現象がある。さらに、発表ではスペイン語のsi条件文においても、バ形式やギ形式と類似の制約が見られることを議論した。その議論には、条件付き命令文を(3)と(4)の２種類に分ける必要がある。日本語ではタラが現れるタイプと現れないタイプとして明確に区別される。スペイン語のsiにも(3)のタイプにおいてバやギと類似の制約があることを議論した。

（ありた　せつこ）

台湾華語の二つの助動詞について
―似た文脈における使用と realis/irrealis 分析の問題点―

鄭　雅云

台湾華語（漢語共通語の台湾変種）の二つの助動詞 *yǒu* と *huèi* は、互いに相反する性格の面があり、それぞれ realis と irrealis という用語でしばしば記述される。それにもかかわらず、二つの助動詞は「未来」「習慣」「現在状態」という 3 つの文脈において、文の意味を大きく変えず置き換えられる場合がある。しかし実は、これは、realis/irrealis 標識によく見られる現象であり、realis/irrealis という用語の最も大きな問題でもある。すなわち、realis/irrealis 標識と言われてきた形式の現れうる環境や文脈が言語間で一貫せず、realis/irrealis の区別に完全に対応しているものがほとんど存在しないという問題である。

本発表では、まず、realis/irrealis という用語を使って *yǒu* と *huèi* を論じている先行研究を参照しつつ、それらにおける realis/irrealis の定義が混乱している問題に加え、出現文脈の整理に終始していることが多いという問題があることを指摘した。そのうえで、上述のように異なる形式の置き換えが可能な場合、ニュアンスの違いや使い分けの原理についての分析と説明が不可欠であることを論じた。

続いて、realis/irrealis という用語から一旦離れ、上述した「未来」「習慣」「現在状態」の 3 つの文脈における両助動詞の具体的な使用を見つめなおし、先行研究で看過されていたふるまいやニュアンスの違いを記述した。発表ではさらに、この観察結果をもとに、両助動詞の中核的な意味を提案し、それにより両助動詞のニュアンスの違いと使い分けの原理が説明されることを示した。台湾華語の二つの助動詞 *yǒu* と *huèi* は、それぞれ異なる中核的な意味をもち、かつ異なる原理により「未来」、「習慣」、「現在状態」の読みを生み出している。これを踏まえて、最後に、両助動詞の違いは、先行研究で言われている「現実性か非現実性」や「現実性の度合い」のように単純な一つの軸で把握できるものではないことを結論として述べた。

（てい　やゆん）

ダパ語類別詞の機能拡張

白井　聡子

ダパ語（ISO 639-3 zhb, シナ＝チベット語族、中国四川省）は義務的な数類別詞を持っている。類別詞の基本機能は、数詞基盤体言化、個別化、範疇化であり、数詞が数量を表す名詞句ないし名詞修飾句を形成する場合は義務的に類別詞を伴う。さらに、類別詞は数詞以外の語に付加されることがある。疑問詞、名詞、形容詞体言化形式である。一方で、東アジアの類別詞言語にしばしば見られる指示詞や属格句への付加はできない。本発表の目的は、名詞に付加される類別詞がどのような機能を持っているかを明らかにすることである。さらに、ダパ語の名詞句には、属格助詞と同一の形式が属格的機能を欠いた名詞句標識として付加されることがある。つまり、属格助詞が他の名詞との関係や所有関係を表すことなく付加される。この名詞句標識との機能的対立も問題となる。

先行研究において、数詞を伴わずに名詞句に直接付加される数類別詞は、裸類別詞 (bare classifier) と呼ばれ、アジアの類別詞言語に広く見られる一方でその談話上の機能が言語によって異なることが指摘されてきた。本発表では、個別性、定性、特定性に加えて定性の分岐と談話上の重要性を基準とすることでより明確に捉えようとした Li (2023) の手法を参考に、物語テクストに現れる裸類別詞ないし名詞句標識を含む名詞句とこれらを含まない名詞句の談話的機能を調査した。

調査の結果、裸類別詞付き・名詞句標識なしの名詞句は主として特定的不定であるが、非特定的不定である例もあり、いずれも談話上の重要性が認められた。特定的不定は物語に主要な人・物を導入する際に見られる。また、名詞句標識ありの名詞句はすべて特定的定であった。一方で、これらを含まない名詞句については、特定的定、特定的不定、非特定的不定のいずれも見られた。これらのことから、裸類別詞の付加には特に談話上の重要性（焦点、前景化）が関わり、名詞句標識には定性が関わり、これらの要素を含まない場合は特定性・定性について指定が無いと結論づけられる。ただし複数接尾辞については今回の調査において定への偏りが見られ、さらなる検討を要する。なお、裸類別詞はダパ語南部方言には見られず、ダパ語北部方言において比較的新たに発達した機能と考えられる。

参考文献

Li, Yu (2023) Referentiality and thematic importance: The discourse functions of Zauzou classifiers. *Lingua*, 285.

（しらい　さとこ）

イラン諸語と言語接触
―タリシュ語を例に―

岩崎　崇雅

本発表では、アゼルバイジャン共和国南部で話される、イラン語派北西語群に属するタリシュ語（アスタラ方言）に見られるチュルク語（主にアゼルバイジャン語）の影響と考えられる例を先行研究と発表者の現地調査の結果から 3 点挙げた（以下の 1. －3. ）。この内、アゼルバイジャン語からの影響がはっきりと指摘できる例は 3. のみであり、他の例に関してはタリシュ語の属するイラン語派北西語群の一部の言語に共通する特徴である可能性を指摘した。なお 3. は先行研究に言及のない用法である。

1. 動詞の現在形（進行形）の形成方法：動詞の不定詞の所格形＋コピュラ動詞の人称形
2. 関係節の形成法:関係代名詞を用いず(先行研究では物語で用いられるとの記述がある)、動詞の分詞形（過去分詞）を用いる方法
3. 条件節及び譲歩節を形成する接語 =sə の用法

この接語 =sə は、疑問代名詞に後続することで不定代名詞を形成する用法をもつ可能性もある（例：ki「誰」、kisə「誰か」）。これらの接語の用法はアゼルバイジャン語の接語 =(i)sə（コピュラ動詞の i- に条件節形成接辞 -sA- が接続した形式）と平行的なふるまいを見せ、クルド語の一部方言やザザキ語、タート語方言といったチュルク語派の言語との接触があるイラン語派の言語には語群を問わず同様の機能をもつ接語や接辞の借用が報告されている一方で、バローチ語やゴラン語（Gorani）、ペルシア語といった、チュルク語派の言語と接触の少ない他のイラン系言語には見られないことから、言語接触の結果、チュルク語から形式をコピーする形で生じたものであることが予想される。

（いわさき　たかまさ）

キルギス語の助動詞 *ele* と文接続機能の可能性

大﨑　紀子

チュルク諸語の多くでは、不完全動詞（不規則かつ不完全な活用をする、単独では用いられない動詞） *e-* の過去形 *edi* ～ *idi* が、コピュラ動詞または助動詞として、西のアゼルバイジャン語から東のサハ語に至るまで、広く用いられている。チュルク語北西グループに属するキルギス語では、*ele* という形式が、他のチュルク語とは形は異なるものの、同様のコピュラ動詞または助動詞として用いられており、名詞述語文や形容詞述語文に添えられて過去の意味を表したり、述語動詞の後ろに添えられて複雑な時制的意味やモーダル的意味を表したりする。その中で他とは異なる韻律を持つ *ele* があることを本発表で指摘した。その *ele* は何か、どのような機能を果たしているのかについて、おとぎ話や童話の音読資料を調査対象としながら、観察と考察を行った。

発表では、まず、韻律の異なる *ele* を考察する前提知識として、助詞の *ele* など区別すべき同音異義語が複数存在すること、キルギス語動詞の活用タイプによって後続する *ele* の形態が異なること、さらにキルギス語アクセントの特徴について説明を行った。そのうえで、通常の *ele* が下降調で発音されるのに対して、上昇調で読まれる *ele* があることを示し、下降調か上昇調かの選択が語り手によって異なることから、それがイントネーションの違いによるものである可能性が高いことを指摘した。そして、上昇調の *ele* が前後の文を接続する機能を持っているのではないかという仮説を提示し、さらに、その仮説が正しければ、逆接の関係を接続することが多いのではないかという指摘を行った。しかし、助動詞 *ele* の意味・用法についての記述が乏しく、アクセントについても十分な先行研究がないことから、仮説を検証するには多くの課題があることを述べた。

（おおさき　のりこ）